

P2-039

幼稚園教諭・看護師を目指す学生の子育て観

田崎 知恵子¹、岸田 敦子¹、久保 恭子²、
山下 麻美³

¹日本保健医療大学 保健医療学部 看護学科、

²東京医療保健大学 看護学科、

³横浜創英大学 看護学部

【目的】

幼稚園教諭、看護師を目指す学生の子育て観を明らかにする。

【方法】

協力を得られた学生に対してオリジナルの調査用紙を用いた。内容は、家庭内の親子のやりとりを想定した32の場面に対して、親の子どもへの対応についてそれぞれ「適切」「不適切」など判断を加えてもらった。

【倫理的配慮】

対象者に対して、調査の目的と調査協力への依頼、協力しない場合でも何の不利益も生じないことを説明し、協力への承諾が得られた者だけを対象とした。記入は無記名とし結果集計に際して個人が特定されることはないことを口頭で付け加えた。

【結果】

114名の協力が得られた。判断が分かれた場面には、「2歳の子どもが居間で粗相をしたので、「ここはトイレじゃないでしょ」と言い聞かせた。(適切75名、不適切28名)」「5歳の子どもが電車内で靴を履いたまま座席に立ち上がっているのだから「落ちると怪我をするから!」と注意した。(適切47名、不適切62名)」「妹が生まれて、退行現象の見られる3歳の長子に『お兄ちゃんだから甘えないでしっかりしなさい』と言った。(適切32名、不適切70名)」「同じく退行現象がみられる3歳の長子が、「抱かれていた生後10日の妹の頭を叩いたので、『叩かれたら痛いんだよ、ほら!』』と言った。(適切26名、不適切68名)」などがあつた。また、「明らかに、この子(4歳)がフローリングに落書きしたのに、『僕はやっていない、弟(生後6カ月)がやった』と言うので『嘘をつく子はママの子じゃない、よその子は出ていけ!』と子どもに言った。」は14名が適切と判断したがその理由は、よくある親子の会話である、このくらい言っても4歳児は家出をしない、などであった。「いつまでも宿題をしないでゲームをしている小学1年の子どもの夕食を罰として抜きにした。」は7名が適切と判断したがその主な理由は、罰を与えることも必要だから、であった。

【考察】

対象者は、看護や幼児教育の教科を通して子どもの発達や権利擁護について既習している。しかし、体罰や子どもの自尊心を脅かす対応について判断が分かれたことは驚きであり、自身の生育上の影響が反映されていると推察された。将来専門職として多くの子どもたちに関わり影響を与える立場にあることを自覚し、子どもの養育について慎重に考えることができる教授方法を検討したい。

P2-040

看護学生の子どものイメージに関する研究

二宮 千春¹、中新 美保子²、西村 直子²、
井上 清香³、貞政 宗司朗¹

¹川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究所 保健看護学専攻、

²川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科

³川崎医科大学附属病院

【目的】

看護学生が抱く子どものイメージは一般的に肯定的とされる。しかし、時代の変化と共にそのイメージの捉えは変化しているように感じる。筆者らは、小児看護学の教授方法の参考とするために、毎年小児看護学受講前の学生に子どものイメージを尋ねている。今回、異なる年代の学生の子どものイメージを比較することで、学生の傾向に若干の示唆を得たので報告する。

【方法】

対象：C大学2年次生462人(有効回答率 83.2%)、A群は171人;1999~2001年、B群は291人;2013~2015年。調査方法：無記名自記式質問紙を用いた一斉調査。質問はイメージ15項目、親和感情5項目、好嫌度について5件法で回答を求め得点化した。属性はきょうだいの有無、きょうだい順位、乳幼児が身近にいるかの有無であった。分析方法：イメージ・親和感情・好嫌度と属性および年代間の差についてt検定(P<0.05)を行った。2要因で有意差があつた項目は2要因被験者間分散分析を行った。倫理的配慮：質問紙に研究目的で使用する場合の同意について意志を確認し、同意があつたものを対象者とした。

【結果】

1. イメージときょうだいの有無は、「みずみずしい」はきょうだい有り群がより得点が高く、イメージと乳幼児が身近にいるかいないかは、「純粹」「丸い」で乳幼児が身近にいる群がより得点が高かつた。イメージと年代比較は、「ぼちゃぼちゃ」「みずみずしい」「丸い」「かわいい」はA群の得点が高い得点が高かつた。
2. 親和感情ときょうだい順位は、「話したい」は下のきょうだい有り群がより得点が高く、親和感情と年代比較は、「話したい」はA群がより得点が高かつた。
3. 好嫌度ときょうだい順位の比較は、「好き」は下のきょうだい有り群がより得点が高かつた。
4. 2要因被験者間分散分析の結果では、「みずみずしい」は兄弟の有無に主効果が認められ、「話したい」はきょうだい順位に主効果が認められた。「丸い」は年代と乳幼児が身近にいるかいないかともに主効果を認めなかつた。

【考察】

子どもに対するイメージや親和感情は、年代間の違いによって差があつた。また、下のきょうだい有り群が子どもを好きと捉え、親和感情も高く、またきょうだい有り群や乳幼児が身近にいる群が子どものイメージが高いことが示された。子どもに肯定的なイメージを持ち接することが出来るように子どもと触れ合う機会を提供し、小児看護に興味をもてる教授法を考察していきたい。